

## 特集 教育・協同を考える／黄柳野塾・設楽

## 自然の中で共に働き、学ぶ

## 設立目的

黄柳野塾は、黄柳野高校とともに「黄柳野の教育」の1つの柱として、昨年4月開塾しました。黄柳野の教育を求める子供たちの選択の機会を広げ、交流する場を提供することが目的です。豊かな自然の中で、何かを作るために働きながら、自分自身を見直し、今後の自分のあり方を模索する場としてこの奥三河の地に開塾しました。

## 1年間の歩み

- ◎【地域の方をお招きし、今後に向けて期待をふくらませた開塾式・4月】
- ◎【7反の畑、草を刈り、耕し、牛糞・鶏糞をまいた5月】

私たちの実習の場は、7反の畑と3aの水田。子供たちはもちろん、スタッフも農業は初めての経験。そんな農業素人人間の集団だからこそ、チャレンジできた無農薬・有機農業。茶摘みやトマトハウスでのアルバイトで身体をほぐし、19日には、田植え（手植え）をしました。

- ◎【ビニールハウスをたて、畝をつくり、トウモロコシ・トマト・なす・きゅうり・かぼちゃ・大豆などの苗を植えた6月】

農学校のパイプを借りて、10坪のハウスを2棟建設。自分たちの城も出来、いよいよ本

## 黄柳野塾スタッフ一同

格的に始まろうとしている野菜作りに、期待を膨らませているスタッフ。しかし、この頃、子供たちは毎日の畑仕事にあきあきし始めていた。ノルマをこなすために昼すぎに重い体をひきずって畑に出てくる。「こんなの強制労働じゃないか」、不意打ちの、しかし核心をついた言葉が子供たちから飛び出す。スタッフは、「学習したい人には学習を、働きたい人には働くこと」子供たち自ら選択・決定するよう提案。

- ◎【続く畝づくり、苗を植える7月】

一旦は「働く」ことに決めた子供たちだったが、降り続く雨にすっかりペースを乱され、昼夜逆転の生活。皆でいかに遊び、騒ぐかという毎日。楽しさのみを追求する雰囲気が続くある日、「みんな一旦家に帰って考えてみよう。塾でそれぞれ何がしたかったのかゼロから考えよう。」とスタッフは提案。くやし涙、怒りをこえ、それぞれじつくりと今までをふりかえった。

- ◎【それぞれアルバイトに精を出した8月】

イヤイヤではあっても、今までに経験のなかった畝づくりや田植え、そして定植に取り組んだ子供たち。そんな中で不知不識のうちに「働くこと」に自信をもった子供たちは、それぞれアルバイトに全身で打ち込んだ。や

り終えた子供たちから届いたあの弾んだ声が今でも耳の奥に残っている。「いま東京。親が初めて私を信用して、遊んでくれることを許してくれたよ！」

◎【農業・養鶏・販売と係を決めて動き始めた9月】

子供たちの自主性を尊重すると言いながら、何をどれだけ植えるかはスタッフがすべて決め、それを押しつけていた1学期。そこで、全員がいつも農業をするのではなく、農業には、自分の畝を作ってそれぞれ自分で選んだ作物の種や苗を植えることで基本的に全員が係わりながら、平素は「係」に分かれて行動することを提案。「農業係」「養鶏係」「販売係」と分かれて行動することに決定。養鶏係は、古い鶏舎をコツコツと修理し始め、販売係は、各地のバザーで販売したり、電話やF a x で注文を受け、品物を発送。

◎【稲を刈り、小豆、大豆を収穫した10月】

10月10日事前の塾舎に移転。目の前にテニスコートが広がる開放感のある環境に子供たちも興奮気味。それぞれの仕事を終え、夕食後、22:00頃までテニスや野菜に取り組む毎日が続く。1学期とは異なり、子供たち一人ひとり塾を作っていく「担い手」として大きな力を発揮するまでに成長。

自分で作物を決め、種を蒔き、それが一人前の野菜として立派に成長。自分の作物を通して自然と素直に向き合って作物を育てた喜び、育った感動。1学期にあれほど農作業を嫌がっていた子供たちが、積極的に畝づくり、草抜きに取り組んでいる姿にスタッフが感動。

◎【タマネギを植え、自分の畑でできた作物を収穫し、名古屋コーチンのひな100羽を迎え、

販路開拓に町へくりだした11月】

◎【収穫した大豆で豆腐をつくり、大根などを収穫し、稲の脱穀・もみすりをやり、採卵用の鶏を100羽迎え、年末年始用の販売にチラシを配布した12月】

11月6日、初氷・初霜。ナス、ししとう、トマト、地這キュウリが全滅しました。標高650mの名倉高原の本格的な冬の訪れの幕開けでした。そんな中、鶏たちは、寒さに負けず、12月27日、初めて卵が10ヶ1パックそろいました。

◎【収穫した大根を十分天日に干し、漬物にしたり、洞窟探検や、2月のマレーシア行きにそなえ、マレー出身のパン・アチンさんを招いてマレー料理の研究をした1月】

◎【マレーシアへの海外研修で、たくさんのエピソードが生まれた2月。英語の勉強の必要性もちょっぴり感じました】

寒い時は、マイナス15度になるここ名倉高原。私たち全員、初めて経験する寒さです。そんな中でこの一年間、農業では、畑づくり始まり、色々な野菜づくり、養鶏では、餌のやり方はもちろん、生まれたてのかわいいヒヨコが成鶏になる過程、販売で、色々な人と接触すること、その他、わらじづくり、コンニャクづくり、豆腐づくり、味噌づくり等の「何かをつくること」を基本に色々な体験をしました。また、太鼓のプロ集団との交流、マレーシアでの外国人との交流等、人や自然とのふれあいの中で塾生だけでなく、私たちスタッフにとっても、一人ひとりが大きな物を得た一年だったと思います。

来年度に向けて

この1年間を振り返った時、ほとんどの子供が大きく変わりました。話せなかった（自分を出せ

なかった)子が、自分の意志を出せるようになったり、話せる子は、他人を思いやる心が場面々々で出てくるようになりました。また、少人数での共同生活の中で、仲間やスタッフに心を開き、人間関係を結べるようになった子、これらは大きな成果として一定の評価が出来ると思います。しかし反面、塾に適應出来ず、去っていった子供も出てきました。年度末の現在、来年度の「塾のあり方」が見えるように、「子供たちにとって、黄柳野塾はどうだったか」という観点で、一人ひとりのテーマとその到達度の確認をしています。そして、「塾としての役割・使命は何なのか」「単なる

精神的な癒しの場になっていなかったか」「自立へのとっかかりをつかむための環境づくりは出来たのか」等々、根本的なところでの問いなおしをしています。

子供たち一人ひとりにとって、本当に意義ある黄柳野塾作りを、多くの方々のお知恵を頂きながらしていきたいと思っています。

### 黄柳野塾・設楽

愛知県北設楽郡設楽町大字川向字市場口山 2

TEL 05366-5-0303

FAX 06366-5-0388

特集 教育・協同を考える／共につくる会

## 「人間教育をすすめる学園と共につくる浜松の会」の結成と黄柳野高校

佐々木 忠栄 (静岡県／「共につくる浜松の会」事務局長)

「人間教育をすすめる学園を共につくる浜松の会」(以下簡単に、「共浜会」という)の結成と黄柳野高校とのかかわりについて述べていきます。しかし、「共浜会」の誕生は「共につくる会」本部発展の過程から生まれています。そこで、「共につくる会」本部について、手元の資料等を参考にしながら、簡単に説明したいと思います。

黄柳野高校設立準備委員会が1990年4月に発足しますが、それと同時に、「人間教育をすすめる学園を共につくる会」の発足準備も進められ、同年9月には山田正敏先生(愛知県立大教授)を会長として、正式発足しました。

黄柳野高校と「共につくる会」とのかかわりについては、黄柳野高校設立趣意書及び「共につくる会」の会則から明確につかみとることができます。

設立趣意書は、「私たちは、人間の全面発達を

すすめるために、子ども達の持っている多様な可能性・能力をひきだし、心の自由と自立・連帯を育て、情操・自己表現を重視した教育を実現するための学校を多くの皆さんとの協同の力で創ることを決意しました。」と述べているように、協同の力による「人間教育をすすめる学園づくり」が提起されています。一方「共につくる会」の会則には「今、人間教育をすすめる学園づくりがすすめられています。この学園は多くの人々の手によってつくられ、親の願い、地域の願い、こども達の願いを実現できるものにしていきたいと思っています。

そのために「共につくる会」が設立されました。黄柳野高校の設立を教育内容と資金面で支えると同時に、多くの方々と共に教育というものを考え、人間教育をすすめる学園を全国各地に広めていく会です。」と規定しています。